

『吉川英治さんから学ぶ』

昭和37年に亡くなった吉川英治さんは、「宮本武蔵」「水滸伝」「新・平家物語」など今も多くの人たちに愛読されているすばらしい作品をたくさん残した有名な作家です。

この吉川さんは小学校しか出ていません。父親が事業に失敗し貧乏のどん底に落ちてしまったため、小学校も途中でやめ、働かざるを得ませんでした。それからは、造船所の職人、行商人、活版工など、たくさんの職業を次々と変えながら、自力で勉強と修行を続け、ついに自分の進むべき道を見つけ出し、小説家となりました。

この吉川英治さんが生き方の指針としていたことが「我以外皆我教師^{われいがいみなわがきょうし}」という考え方です。「自分以外は、すべてが自分の先生である」「どんな人でも、山も河も、草も木も鳥も虫も、およそこの世にあるすべてから学ぶのだ」こう考えて生きていったのです。

世の中にあるものはすべて自分の先生であると言うと、世の中には悪い人間もいる、常に人を騙して自分の利を得ようとする者、いじめを繰り返す者、人のものを盗む者など、そういう人間も自分の先生になるのか、こんな疑問が湧いてくると思います。吉川さんはおそらく、そういう人もやはり自分の先生だと考えたのではないかと思います。そのような「反面教師」、つまり逆の意味の先生からも、こうなってはいけない、それは人間として間違っている、ダメということを身をもって教えてくれる先生だと吉川さんは受け止め、学ぶべきところを吸収していったのではないのでしょうか。

吉川英治さんが残した名言と言われるものに次のようなものがあります。

『逆境を転じて

その逆境さえ

前進の一步に加えていく』

この言葉からも、まさに逆転の発想をもって、苦境に立った時でも、そこから何かをつかみ取って、生きていくことの糧を得ようとする意気込みが感じられます。

また、吉川さんが残した別な名言では、次のように言っています。

『登山の目標は山頂と決まっている

しかし 人生の面白さは その山頂になく

かえって逆境の山の中腹にある』

この言葉からは、逆境の真ただ中にあってもがき苦しい時でさえ「面白さ」ととらえ、楽しさに転じていくという考え方を感じ取ることができます。

このように吉川英治さんの発想の転換やポジティブな思考に基づいた生き方には、学ぶべきところが大きいと考えます。

さて、今のこどもたちは、逆境をどう乗り越えていっているのでしょうか。そもそも今のこどもたちには、「逆境の中にいる」という思いなどあるのでしょうか。吉川さんの時代のように、貧乏のどん底を味わうなどということは極めて少ないでしょうし、働いて家計を助けるなどといったことはないでしょう。衣食住においては何不自由なく、欲しい物にも恵まれているのではないのでしょうか。

しかし、今のこどもたちの中には、不安定な気持ちがぬぐいされないとか、心が病んでいるとか、夢や希望をもてないなど、様々な悩みに直面しているこどもたちが少なくありません。その要因としては、家庭環境にあたり、保護者との関係、友人関係、学校への不適應、自信喪失、何をしてよいかわからないなど、これもまた様々な要因が複雑に絡み合っているようです。中でも、いじめが原因で孤立感を味わいながらとうとう自殺してしまうこどもたちがいることも事実です。今の時代、とんでもない苦境の中でもがき苦しんでいるこどもたちが多数存在すると言えます。

とてつもなく悩み苦しんでいるこどもたちに「頑張れ！」という言葉がけは危険極まりない場合があります。そのようなこどもたちは、「頑張ろう、頑張らなくては」と自分自身に言い聞かせつつもどうすることもできなくてそこに至っているからです。

このように自分自身をどんどんと追い込んでいってしまっているこどもたちには、「頑張らなくていいんだよ」という声かけをしてもよいのかなと思います。また、そのようなこどもたちが逆転の発想で自分自身に「そんなに突き詰めなくてもいいや」と開き直す気持ちをもつことができるようになってもらいたいとも思うところです。

これからの子どもたちには、吉川さんのように、苦しさの中にも楽しさを見出したり、そこから何かをつかみとってやろうとする「したたかさ」を備えてほしいものです。